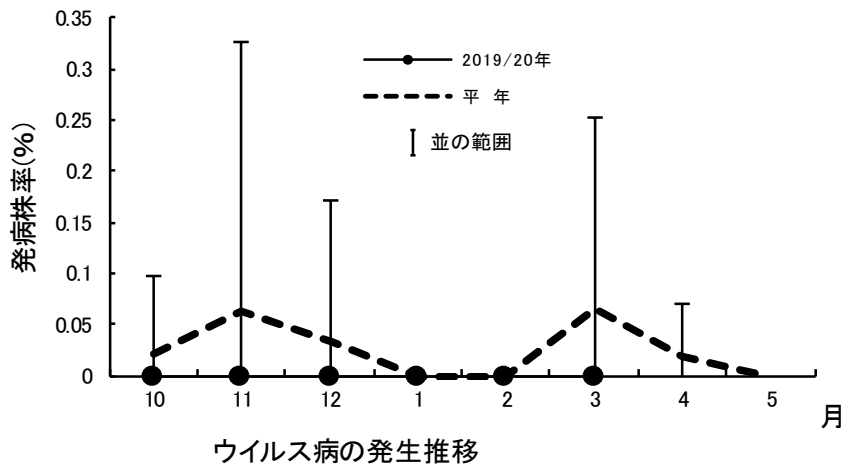



作物	トマト(施設)	地域	沖縄群島
病害虫名	モザイク病		
予報	4 月の発生量 (平年比)	並	
	3 月からの増減傾向	↘	
予報の根拠	3 月の発生量 (平年比)	(発生なし)並	
	その他 (気象要因など)	平年の発生量の推移 (↘)	

調査結果

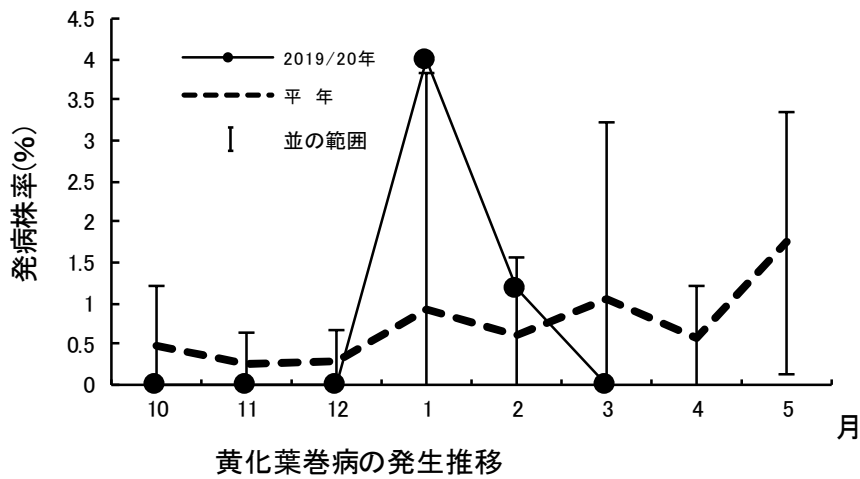


防除のポイント

- ・媒介虫であるアブラムシ類の侵入防止、早期発見・防除に努める。
- ・発病株は伝染源となるため見つけ次第抜き取り、施設外に持ち出しポリ袋に入れて密閉処分する。
- ・本病は汁液伝染するので、ハサミや手の消毒・洗浄を行う。

作物	トマト(施設)	地域	沖縄群島
病害虫名	① 黄化葉巻病		
予報	4 月の発生量 (平年比)	並	
	3 月からの増減傾向	↘	
予報の根拠	3 月の発生量 (平年比)	(発生なし)並	
	その他 (気象要因など)	平年の発生量の推移 (↘) 媒介虫(コナジラミ類)の発生量が増加する見込み	

調査結果




・一部ほ場で多発した。

防除のポイント

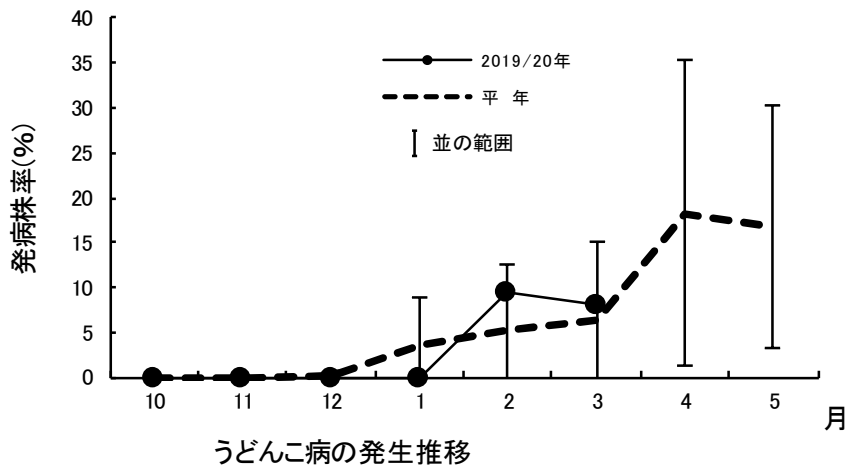
- ・媒介虫であるタバココナジラミの早期発見・防除に努め、伝染源となる感染株は抜き取る。
- ・雑草のムラサキカタバミは塊根に本病の病原ウイルスが感染し次期作の伝染源となるため、根から抜き取る。
- ・感染株及び摘葉残さ、ムラサキカタバミは、施設外に持ち出し必ずポリ袋に入れて密閉処分する。



伝染源となるムラサキカタバミ (ヤハタ)

作物	トマト(施設)	地域	沖縄群島
病害虫名	② うどんこ病		
予報	4 月の発生量 (平年比)	並	
	3 月からの増減傾向	↗	
予報の根拠	3 月の発生量 (平年比)	並	
	その他 (気象要因など)	平年の発生量の推移 (↗)	


調査結果



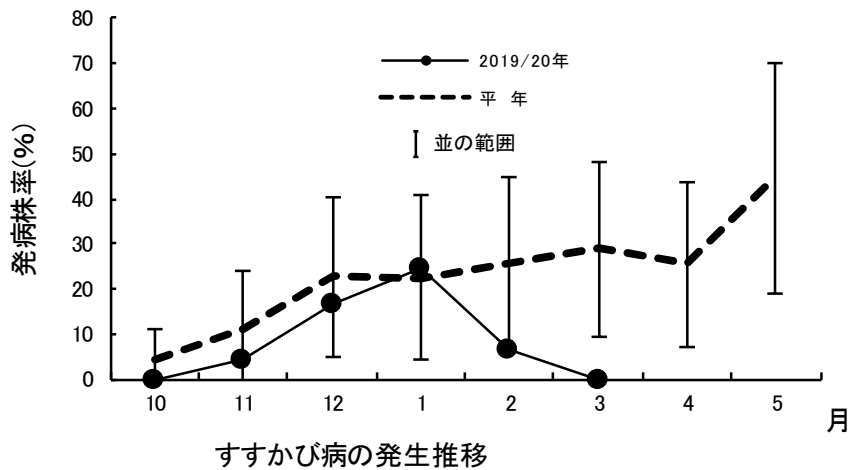
- ・ 菌の発芽適温は、20～25℃である。
- ・ 一部ほ場で多発した。

防除のポイント

- ・ 通風が悪いときに多発生しやすいので、老葉を除去し、透光通風を良くする。
- ・ 多湿条件で発生し、その後乾燥が続くと被害が拡大するため、湿度管理に注意する。
- ・ 今後、発生が増加すると考えられるので防除を徹底する。
- ・ 多発すると防除が困難となるので、葉をよく観察し早期防除に努める。

作物	トマト(施設)	地域	沖縄群島
病害虫名	すすかび病		
予報	4 月の発生量 (平年比)	並	
	3 月からの増減傾向	→	
予報の根拠	3 月の発生量 (平年比)	やや少	
	その他 (気象要因など)	平年の発生量の推移 (→) 今後 1 か月の気温が平年より高い見込み	


調査結果



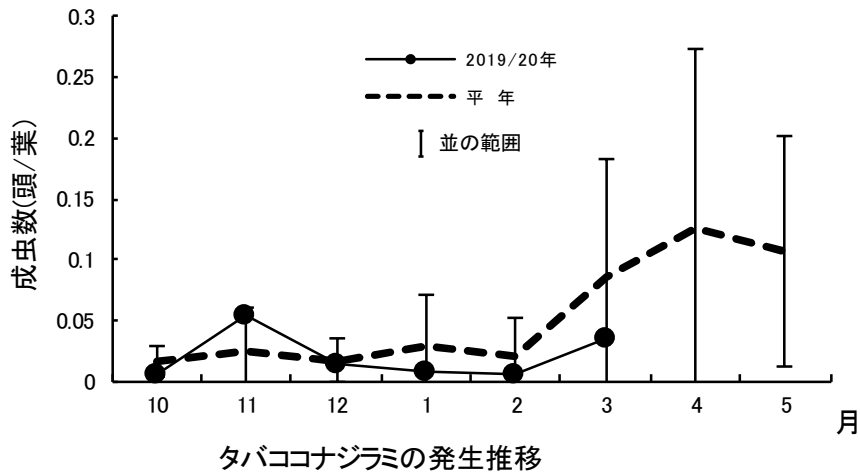
- ・ 菌の生育適温は、26～28℃である。

防除のポイント

- ・ 多発すると防除が困難になるので、予防散布及び初期防除を徹底し、感染の拡大を防ぐ。
- ・ 潜伏期間が長く初発後の感染拡大が早いいため、昨年発生があった施設では特に予防散布を徹底する。
- ・ 多湿条件や密植、過繁茂で発生しやすいため、排水や換気を良くする。
- ・ 発生源となる不要な老葉、下葉は除去し、透光通風をよくする。
- ・ 除去した葉は放置せず、施設外に持ち出し処分する。
- ・ 薬剤抵抗性を発達させる可能性があるため、同系統薬剤の連用を避ける。


作物	トマト(施設)	地域	沖縄群島
病害虫名	③ コナジラミ類		
予報	月の発生量 (平年比)	並	
	3 月からの増減傾向	↗	
予報の根拠	3 月の発生量 (平年比)	並	
	その他 (気象要因など)	平年の発生量の推移 (↗)	

調査結果

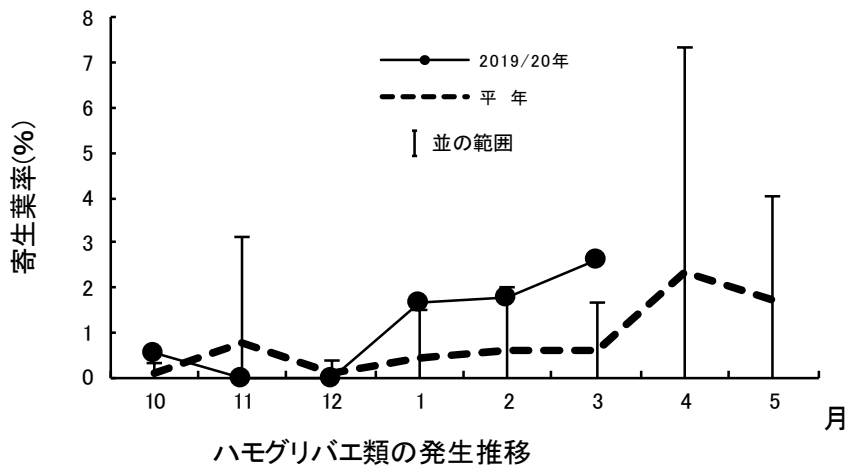


防除のポイント

- ・本種はトマト黄化葉巻病を媒介する。
- ・多くの雑草が発生源となりうるので、施設内外の雑草除去に努める。
- ・施設開口部には目合い0.6ミリ以下の防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
- ・黄色粘着テープ等により、早期発見・防除に努める。
- ・幼虫は下位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。

作物	トマト(施設)	地域	沖縄群島
病害虫名	④ ハモグリバエ類		
予報	4 月の発生量 (平年比)	並~やや多	
	3 月からの増減傾向	↗	
予報の根拠	3 月の発生量 (平年比)	やや多	
	その他 (気象要因など)	平年の発生量の推移 (↗)	

調査結果



・一部ほ場で多発した。

防除のポイント

- ・摘葉等による残さは成虫の発生源となるので、施設外に持ち出し処分する。
- ・本種は多数の在来天敵が存在することから、天敵に影響の少ない選択性殺虫剤を使用する。
- ・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。
- ・幼虫期間が比較的に短いため、葉の表面に産卵痕や食害痕がみられたら防除を開始する。
- ・農薬やその他の防除資材の効果は幼虫の体色で判定する。生存時の幼虫の体色は黄色で、死亡すると黒色に変化する。